

「俺はいつかフェラーリに乗るぞ」。「そんなら俺はベンツや」。大阪でラーメン店を経営する永大安に入社した石野康弘には、同じ年のライバルがいた。社長・岡田國男の長男、貴行である。2人とも、「超」のつく負けず嫌いである。

東大阪市の店に配属された石野と貴行は四六時中、張り合った。閉店時刻の午前5時を過ぎても、どちらかが店を閉めようというまで営業は続く。7時を過ぎると早番がやってきて「またお前らか。帰ってくれ」と、あきれ顔で言う。勝負はいつも引き分けだった。出勤時刻も同様だった。定時は午後6時なの

消えた独立心

それでいて仲が悪いわけではない。2人は互いを親友と認め合い、石野は「タカ(貴行)」と一緒に師匠(岡田)を喜ばせたい。もっと師匠の喜ぶ顔が見たい」と心底思った。入社当初、胸に抱いていた「独立」の2文字はいつの間にか消え失せていた。

勝負へ恩返し 金沢に1号店



初めて雇った店員(左)と写真に収まる石野。店にずっと張ってあったため、ぼろぼろだ—97年11月、金沢市西泉2丁目のらーめん世界西泉店

4年目の1996(平成8)年6月、石野は、いつものように、その日の永大安の社員となって自宅を訪ねた。帰ろうとする石野を岡田は呼び止めた。居間に座らせた。「何を怒られるんやろう…」。

売り上げを届けに岡田の自宅を訪ねた。帰ろうとする石野を岡田は呼び止めた。居間に座らせた。「何を怒られるんやろう…」。

師匠から200万円

石野の目の前に差し出されたのは、茶色の紙袋。中に2千万円はあるだろうか。現金がぎっしり詰まっていた。「お前は俺の誇りや。これで大きくなれ。ふるまことに帰って独立せい」。石野が岡田を父と慕うのと同じように、岡田は石野を息子のようになんて思っていたのだ。

「儲かったら返してくれればいい。失敗して返せなかったら、戻ってこいや。またチャンスやる」。石野は岡田の熱い思いに、頭が真っ白になった。思わず断ったが、

岡田の意志は固い。石野は胸がいっぱいになった。岡田の家を出た足で、故郷・富山に向かった。

富山では適当な物件が見つからず、金沢の不動産業者を当たった。連れて行かれたのは、西泉2丁目の角地。「商売するのならあんまりお勧めできんよ」と不動産屋は言った。場所はどこでもよかったから、即決した。

1カ月半後の96年8月、西泉2丁目に「らーめん世界」がオープンした。石野は開店直後の苦境を乗り切り、開店資金を1年半で完済した。金は返しても、師匠への恩返しは、まだまだ続く。

(道上宗雅)